

1998年（注7）以降、新たに出土した遺跡と文献など

No	遺跡名	所在地	文献
3	外馬屋前田(1)	西津軽郡鯨ヶ沢町北浮田字外馬屋前田	県242集、1998年
13	内真部(9)	青森市内真部字岸田	青森市43集、1999年
2	今須(3)	西津軽郡鯨ヶ沢町北浮田字今須	鯨ヶ沢町14集、1999年
19	新町野	青森市野木字山口・合子沢字松森	青森市53集、2000年
63	滝端	三戸郡階上町平内字滝端	階上町教育委員会、2000年
18	朝日山(2)	青森市細越字栄山	県324集、2002年 他
1	尾上山	西津軽郡深浦町深浦字尾上山	県347集、2003年
7	坊主沢	北津軽郡小泊村字坊主沢	(2003年葛西励先生のご教示による)
64	宮田館	青森市宮田字玉水	2003年縄文講座の際、展示品を実見

遺跡の製塩土器と製塩用土釜については「考古学研究」（前掲）や「北奥古代文化」（1973 5号）などにも掲載させて頂いたにも関わらず土釜などの遺構配置図、実測図、注記などを併載できず、過去30年間にわたりその所在を捜し求めてきた。最近ようやくそれらの一部を入手することができたので、これらの「大きな忘れ物」（一部）の公開と「忘れ物」を捜している間に採録した塩釜に関する文献史料や民俗例を引用して、青森の製塩用釜（窯）を中心にその史的経過を概観してみたい。なお、大浦遺跡は、『新青森市史』資料編考古の編目案にも取り上げられている遺跡のひとつで、筆者も同遺跡の執筆担当者の一人である。担当は平安時代で、古い文献史料については全くの門外漢であることを最初からお断りしておきます。

（注5）日本塩業大系編集委員会編 昭和52年（1977）『日本塩業大系 特論民俗』、392、393頁、所収

（注6）青森市教育委員会 1972 青森市の文化財7

（注7）青森県教育委員会 1998『白砂・大沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第246集

3 塩釜の考古資料

（1）青森市大浦遺跡（注6）

調査期間 昭和46（1971）年7月26日から8月2日までの8日間

所在地 青森市野内字浦島（図2 大浦遺跡位置図参照）

以下 報告書および（注4）「付記 青森市大浦遺跡調査略報」を若干補足して、その概要を記載する。

製塩跡（図3 A地点調査区配置図）

約100m²を発掘して279点の遺物と3基の製塩用土釜が出土した。

[遺物] 白砂式製塩土器片156点、土製支脚類72点、土師器5点、須恵器22点、古銭3（寛永通宝2、元豊通宝1）、鉄片2、骨片6、貝殻若干などが土釜の周辺から散乱、堆積した状態で出土した。遺物は土釜の内部から殆ど出土しなかった。元豊通宝は、2号釜跡焼土面上から出土した。



图2 大浦遺跡位置図

[遺構] 土釜は3基とも粘土・玉石・貝殻粉末入り漆喰^{しっくい}で築造したものとみられる。

3基は並列し、1号釜跡と3号釜跡は一部重複している。土釜の平面形は、楕円形、断面は半円状を呈す。規模は、内径2.1×2.5～2.3×2.7mを測る。土釜の外周には焼石と焼土面が3.7×4.0～4.0×5.0mの範囲で土手状に巡らされていた痕跡が認められるが、土釜の上部構造は数年前に行われたトンネル工事の際削り取られ、原形は不明である。土釜内部の断面層序は、幾分乱れているがほぼ弧状を呈し、深さは45～95cmである。＜追加＞最近発見した実測図には土層の注記は全く記録されていない。当時の調査日誌によれば次年度も調査を継続する旨、地権者（川村充一氏）と市当局が合意していたとあるので注記は次年度に廻された可能性もあるかも。いずれにしても調査は単年度で終了できなかった。

調査開始前の予想では、土釜のような遺構は、土器製塩炉（カマド・竈^{かまど}状のものを含めて）ではないかと想定していたが、土釜のような遺構の内部からは製塩用土器、土製支脚などがほとんど出土しないこと、土釜内面は半円状で土製支脚などを固定した形跡がないこと等から文献上「津軽亀田郡平内茂浦実記」^(注8)で知られている製塩用土釜と判断せざるを得ないと考えた訳である。

検出した3基の土釜は、白砂式土器製塩跡を整地して構築したものと想定される。元豊通宝（初鑄1078年）は、土器製塩の下限と土釜製塩の上限を探る上で重要な傍証となるであろう。なお、当地方で最古の文献上の製塩史料は、^{きょうろく}享禄3（1530）年で、土釜によるものとみられる^(注8)。[これについては後で触れる]そして鉄釜の導入は、元禄15（1702）年以後といわれている。[ここから以下の記載は「付記 青森市大浦遺跡調査略報」にのみ報告してある]。

以上のことから、本遺跡は3時期（縄文時代晩期、平安時代・10世紀前後、中世～近世）3型式（土器製塩、製塩土器＋土製支脚＋炉、土釜）の製塩形態が認められ、東北地方北半における製塩を研究する上で類例のない重要な遺跡ではないかと考えられる。と「結び」としていたが、『大浦遺跡調査報告書』ではカットされていた部分である（下線は、新たに追加、補正した箇所）。

ここで『大浦遺跡調査報告書』の事実記載（実測図 6、17頁）の訂正とお詫びをしておきたい。これは長い間の（忘れ物）の一つであるが、報告書の17頁、実測図6にある白砂式土器と土製支脚は本遺跡の出土品ではなく、白砂遺跡からの採集品で、「考古学ジャーナル38」（注2、第3、4図、18、19頁）で紹介した資料の一部である。何らかの理由で誤って転載されたものであろう。訂正しないまま約30年間放置してきた。時効？前に真実を報告し、これまで放置してきたことをお詫び申し上げる。ついでながら、昔のことを添えておく。大浦遺跡の調査後、7月から10月まで、むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査に調査員として参加し、六ヶ所村を担当した。翌年4月1日付けで県教育委員会に主事として採用され、36歳であった。

（注8）青森市史編纂室 昭和33(1958)年『青森市史』第4巻産業編（上巻）「前編 第6章 製塩業」135頁